

トラークルの痕跡を訪ねて——詩人の没後100年に際して (A. Nakamura)[J]

2014年は第一次世界大戦の勃発から100年になるが、この大戦下では多くの若いドイツ語詩人たちが命を落とした。ゲオルク・トラークル(Georg Trakl 1887-1914)もその一人であった。薬剤師試補としてガリチア地方の戦線に送られたトラークルは、1914年1月3日、クラクフ郊外の小さな町グロデアクで激しい戦闘を体験した数日後、クラクフの野戦病院で隠しもっていたコカインを過剰摂取して死んだ。27歳であった。その直後に遺骸はクラクフの共同墓地に埋葬されたが、11年後に、インスブルック郊外ミュラウの共同墓地に移された。

私が初めてその墓地を訪れたのは、もう30年近く前の8月の夏の日のことであった。墓地は観光客の行きかうインスブルックの街の喧騒から離れてひっそりと静まり返っていたが、その中を、夏の陽光がさえぎられ、風が吹き抜けるひんやりとした木の間隠れの小道をたどって行きついたトラークルの墓の前に立った時、胸の高鳴りを抑えることができなかった。それは、一本の白樺が影を落とす地面に、咲き乱れるベコニアの花々に囲まれて、それまで繰り返し読んでいた Otto Basil の記したトラークルの伝記の最後のページの写真のとおり(注1)、Georg Trakl という名前とオリーブの枝の絡んだ、糸の切れた豎琴が刻まれているだけの墓石を自分自身の目で見て、詩人の存在をそれまでになく強く感じたからだけではない。その詩人の墓碑の隣には、もう一つ、まるで兄弟のようにほとんど同じ大きさの墓石が並んでおり、そこには Ludwig von Ficker(1880-1967)の名前が刻まれているのを見つけたからでもあった。ルードヴィヒ・フォン・フィッカーはインスブルックの表現主義雑誌 *Brenner* の編集・発行者であり、20世紀前半のオーストリア文学を牽引した一人と言ってよいだろう。トラークルの詩作は、習作期を除けば、1909年から亡くなるまでのほぼ5年間と短い、その中でも主要な創作活動は1912年にフォン・フィッカーと知り合ってから以降、亡くなるまでの2年間の間になされたといえる。彼の詩は1912年以降、まず *Brenner* 誌に掲載されるようになる。このように創作の発表の場を提供するだけでなく、フォン・フィッカーはしばしばトラークルをミュラウの自宅や、兄の所有するインスブルック郊外ホーエンブルクにある屋敷に招き、励ました。フォン・フィッカーを中心とした *Brenner* サークルがトラークルにとってこの時期、ほとんど唯一の安らぎの場であったことは、例えば1913年2月23日にフォン・フィッカーに宛てて書かれた「『ブレンナー』は私にとってどんなに重要であるかを、そしてこの高貴な人々との交わりの中に、故郷が、隠れ家があることを、ますます深く身に沁みています。」という手紙の言葉がはっきりと示している。この手紙の書かれた翌年の8月に、トラークルは戦場に赴く。10月になってフォン・フィッカーは「どうかぼくに二言三言、電報を打ってください」という葉書を受け取る。フォン・フィッカーは、戦場にいるトラークルに自分たちが送った便りが一通も届いていないことを知り、すぐさまクラクフに向かい、10月24日と25日の2日間をトラーク

ルとともに過ごした。トラークルが死んだのはその1週間余り後のことであった。一度はクラクフで埋葬されたトラークルの遺骸がミュラウに移送されたのも、フォン・フィッカーの強い働きかけによるものだった。クラクフの共同墓地の管理記録に登録されていたトラークルの名前の表記が誤っていたため、その墓をつきとめるのも容易ではなかった。1922年によろやく墓が判明した後、フォン・フィッカーの約2年にわたる粘り強い努力の末、1925年10月7日、故国の墓地でひっそりとトラークルの葬儀が行われた。

トラークルが、その死後もなおフォン・フィッカーにとってどれほど重要な詩人であり続けたかは、1947年にこの墓を訪れた若いパウル・ツェランの手紙からも伺い知ることができる。両親や多くの同胞たちが強制収容所に送られて殺されたツェランは、故郷のブコヴィーナを離れ、ブカレストを経てようやくたどり着いたウィーンを数か月後には去り、パリへ向かった。その途上で、彼はインスブルックで途中下車して、花と、途中の道で折り取った柳の枝をトラークルの墓に供えたのだった。Israel Chalfen や John Felstiner や関口裕昭氏も詳しく記しているように（注2）、その時ツェランは老いたフォン・フィッカーに会う機会も得て、彼の前で自作の詩を朗読した。彼は友人への手紙で、フォン・フィッカーからエルゼ・ラスカー=シューラーの後継者になるべき詩人と言われたこと、ラスカー=シューラーはトラークルにも影響を与えた詩人であることを教えられたこと、彼らの系譜に自身も連なる詩人として認められたと感じたこと、そしてフォン・フィッカーが「自分の詩のユダヤ的なものに理解を示してくれた」ことの喜びを伝えている。トラークルと、彼より20歳近く年長のユダヤ系女流詩人であるラスカー=シューラーは、1914年3月にベルリンで知り合い、互いに共鳴し合うものを感じたようだ。トラークルはこの時にベルリンで書いた詩「夕暮れの国」に彼女への献辞を付しているし、ラスカー=シューラーはトラークルの死の報に接して追悼の詩を書いている。ツェランの伝えるフォン・フィッカーの言葉は、こうしたトラークルとラスカー=シューラーの深いつながりを示すと同時に、フォン・フィッカーのトラークルに対する変わる事のない強い敬愛の念を感じさせるものであろう。フォン・フィッカーは1967年に亡くなるが、フォン・フィッカー家の人々の間にではなく、前述したように、トラークルの隣に、今もまるで彼に寄り添い、守り続けるかのように眠っている。

このようにインスブルックはフォン・フィッカーという最大の理解者の住む場所として、早逝した詩人の晩年にいくばくかの逃避場を提供したと言えよう。では彼の故郷ザルツブルクは詩人にとってどんな場所であったのだろう。

初期の詩の一つで彼はこの町を「美しい町」と呼んでいる。

Die schöne Stadt

Alte Plätze sonnig schweigen.

Tief in Blau und Gold versponnen

Traumhaft hasten sanfte Nonnen
Unter schwüler Buchen Schweigen.

Aus dem braun erhellten Kirchen
Schaun des Todes reine Bilder,
Großer Fürsten schöne Schilder.
Kronen schimmern in den Kirchen.

Rösser tauchen aus dem Brunnen.
Blütenkrallen drohn aus Bäumen.
Knaben spielen wirr von Träumen
Abends leise dort am Brunnen.

Mädchen stehen an den Toren,
Schaun scheu ins farbige Leben.
Ihre feuchten Lippen beben
Und sie warten an den Toren.

Zitternd flattern Glockenklänge,
Marschtakt hallt und Wacherufen.
Fremde lauschen auf den Stufen.
Hoch im Balu sind Orgelklänge.

Helle Instrumente singen.
Durch der Gärten Blätterraumen
Schwirrt das Lachen schöner Damen.
Leise junge Mütter singen.

Heimlich haucht an blumigen Fenstern
Duft von Weihrauch, Teer und Flieder.
Silbern flimmern müde Lider
Durch die Blumen an den Fenstern. („Gedichte“)

美しい町

いくつもの古い広場は、陽を浴びて 黙している。

深々と 青や金色に紡ぎ込まれ
夢のように おだやかな尼僧が 急いでいく
ブナの木の下、重苦しい沈黙の下を。

褐色に明るくなった教会から
見つめている。清らかな死の像たちが、
偉大な君主たちの美しい紋章が。
王冠が 教会で鈍い光を放っている。

幾頭もの馬が 泉水から浮かび上がる。
木々の花爪が 脅かすように迫っている。
少年たちが 夢のために錯乱して遊んでいる
夕べ 声もなく あそこの泉水のほとりで。

少女たちが 戸口でたたずみ、
はにかみながら 色とりどりの生命に見入る。
その濡れたくちびるは 震えている
少女たちは 戸口で待っている。

おののきながら 鐘の音が漂う、
行進の歩調が響く、衛兵の呼び声。
異郷者たちが 階段で耳を澄ます。
高々と 青の中にオルガンの音が響く。

明るい楽器が歌う。
木の葉で縁取られたいくつもの庭をぬけ
美しい婦人たちの笑い声がさざめく。
小さな声で 若い母たちが歌う。

ひそやかに 花の咲き乱れた窓辺に放たれる
薫香、タール、リラの香。
疲れ果てた臉が 銀色にきらめく
咲きほこる花ごしに 窓辺の花ごしに。 (『詩集』より)

1911年、すなわち詩人が24歳の時に書かれたこの詩には、今も私たちがこの町を訪れればその面影に触れることができる事物や事象たちがあふれている。旧市街の中心部を

歩くと、複雑に入り組み、互いにつながっている大小「いくつもの古い広場」に出会う。その核ともいえるレジデント広場の真ん中には、「幾頭もの馬が泉水から浮かび上がる」彫像で飾られた、アルプスの北側では最大のものといわれるバロック様式の壮麗な泉水が置かれている。その泉水の水音とともに、毎日朝の7時、11時、そして夕方の6時には、レジデントの向かいにそびえたつ鐘楼でグロッケンシュピールが奏でられる、その少し音が外れたようなメロディーの、くぐもったような「鐘の音」は親しげでありながらまた物悲しく、一度聴くと耳から離れなくなる。あるいはひしめき合っ立ち並ぶ「教会」の「鐘の音」も朝に夕に鳴り響く。それらの教会の中心であるドームの大理石でできた中央祭壇の脇には「偉大な君主たち」、すなわちこの地の領主であった歴代の大司教たちの墓碑銘が、プットやカルトゥーシェの装飾が施された「紋章」で飾られている。堂内には「オルガンの音」が響き渡り、8世紀初めから続くベネディクト派のノンベルク修道院の「おだやかな尼僧」が跪いて祈りをささげている。これらの事物や事象たちはみな、ザルツブルクの町を7世紀以降統治してきたカトリックの大司教たちの権力や権勢を伝えるものといえよう。定刻に鳴らされる教会の鐘の音やグロッケンシュピールは、人々に祈祷をはじめとする聖務日課を促すばかりでなく、その1日の生活時間すべてを支配するものだったろう。つまり、この詩には、人々を宗教という意味で精神的に、それと同時に領主として物質的に支配してきた力が描き出されている。この詩にはさらに「行進の歩調が響く、／衛兵の呼び声」という詩句も見られる。ザルツブルクはトラークルの時代、ハプスブルク帝国の軍駐屯地であり、こうした音はここに住む者にとってきわめて日常的な音であったろう。そしてそれはフランツ・ヨーゼフ一世の統治下で徹底した官僚主義と並んで特徴的であった軍国主義政策を示すものであろう。つまりこの詩には19世紀から20世紀の転換期において、滅びゆくハプスブルク帝国をかりうじて支えていた、Carl E. Schorske が当時のウィーンの新聞から引いて示すところの「宗教とサーベルの支配」（注3）が如実に現れている。ハプスブルク帝国の一都市であったザルツブルクはこうした軍国主義と宗教という秩序の下におかれ、その秩序の下で人々の生活は一応の均衡を保っていた。つまり表面的にはこの町は、秩序の中に守られた、安全で平和な領域という姿を保っており、その限りにおいて詩人はこの町を「美しい」と呼びえたのではないだろうか。

しかし、この「美しい」守られた領域は実際にはもはや脅かされていた。トラークルの時代、ザルツブルクにも資本主義的な近代化の波が押し寄せていた。彼の生まれる少し前、1860年にウィーンとミュンヘンを結ぶ鉄道がザルツブルクにも開通した。生産や流通の機関である鉄道によって、一方で、この町は資本主義的経済システムの中へと組み込まれていった。他方で、人々や物資の流通は飛躍的に増大し、加速され、それによって町は拡大されていく。かつての城塞として町に不可欠であった町の保塁、すなわち市壁は撤去され、町は無制限に広がっていき、「郊外」という新しい町の形態が生まれる。詩「美しい町」の少し後に完成した詩「南風(フェーン)の吹いている郊外」は、そうした「郊外」を詩の題材としている。

Vorstadt im Föhn

Am Abend liegt die Stätte öd und braun,
Die Luft von gräulichem Gestank durchzogen.
Das Donnern eines Zugs vom Brückenbogen —
Und Spatzen flattern über Busch und Zaun.

Geduckte Hütten, Pfade wirr verstreut,
In Gärten Durcheinander und Bewegung,
Bisweilen schwillt Geheul aus dumpfer Regung,
In einer Kinderschar fliegt rot ein Kleid.

Am Kehricht pfeift verlobt ein Rattenchor.
In Körben tragen Frauen Eingeweide,
Ein ekelhafter Zug voll Schmutz und Räude,
Kommen sie aus der Dämmerung hervor.

Und ein Kanal speit plötzlich feistes Blut
Vom Schlachthaus in den stillen Fluß hinunter.
Die Föhne färben karge Stauden bunter
Und langsam kriecht die Röte durch die Flut.

Ein Flüstern, das in trübem Schlaf ertrinkt.
Gebilde gaukeln auf aus Wassergräben,
Vielleicht Erinnerung an ein früheres Leben,
Die mit den warmen Winden steigt und sinkt.

Aus Wolken tauchen schimmernde Alleen,
Erfüllt von schönen Wägen, kühnen Reitern.
Dann sieht man auch ein Schiff auf Klippen scheitern
Und manchmal rosenfarbene Moscheen. („Gedichte“)

南風(フェーン)の吹いている郊外

タベ このあたりは 荒れ果て 褐色に横たわっている、

大気は 灰色がかった悪臭に 浸されている。
列車の轟が 鉄橋から—
雀たちが 藪や垣のうえに 舞い上がる。

身をかがめている小屋、小径が乱れて 散らばって
庭々には 混乱と興奮、
時折 よく聞き取れない動揺が 咆哮へと高まる、
子供たちの群れのなかを 一枚の服が 赤く 飛んでいく。

塵芥のあいだで 鼠たちのさかりのついた合唱の声が上がる。
女たちが 臍物を 籠に入れて運ぶ。
汚れや疥癬でいっぱい の 吐き気を催す行列、
それらが 夕暮れから 姿を現す。

そして運河が 不意に 血の塊を吐き出す
屠殺場から 静かな川へと。
南風(フェーン)が 貧しい草を 鮮やかに色づける
そして ゆっくりと 赤が 流れを這っていく。

囁く声、それが 濁った眠りのなかで溺れる。
いくつもの形が 溝から ひらひら現れ、
おそらく 昔の生活の思い出、
それが 暗い風にのって 浮いたり 沈んだりする。

雲の間から またたく並木道が浮かび上がる、
美しい馬車、勇ましい騎士たちであふれて。
それから見える、一艘の船が 岩礁に乗り上げて 砕けるのが
時折 バラ色のモスクが。

(『詩集』より)

この詩にあるのは、もはや詩「美しい町」を作り上げていた、伝統的なヨーロッパの都市の構成要素である「広場」「教会」「泉水」「木の葉で縁取られた (...) 庭」といった事物ではない。ここにあるのはそれらから一転して「列車」「鉄橋」「運河」といった近代的な都市の機能を強調する事物であり、その世界を支配しているのは、飢餓や貧困、疾病や犯罪の可能性、つまり「混乱」や「動揺」である。この詩が生まれたのはザルツブルクの北のはずれの市街地区 Elisabethvorstadt であり、今日、この地区にかかる鉄橋のたもとにはこの詩の詩碑が掛けられている。旧市街の真ん中を南北に貫いて流れるザルツァッハ川は、この鉄

橋の下をくぐりぬけ、さらに北へ、ドイツに向かって延びているが、今も、この沿岸を北へ向かうと、団地のような住宅や倉庫や工場が増えていき、索漠とした思いに襲われる。詩「南風(フェーン)の吹いている郊外」は「美しい町」の幻想を剥ぎ、その解体の始まりを告げているかのように思われる。

しかし故郷の町はその後もお詩人を引きつけるものを完全に失ったわけではないことを示す詩を見つけることができる。例えば1913年秋、すなわち詩人の亡くなる1年前に成立した詩「メンヒスベルクにて」を見てみよう。

Am Mönchsberg

Wo im Schatten herbstlicher Ulmen der verfallene Pfad hinabsinkt,
Ferne den Hütten von Laub, schlafenden Hirten,
Immer folgt dem Wanderer die dunkle Gestalt der Kühle

Über knöchernen Steg, die hyazinthene Stimme des Knaben,
Leise sagend die vergessene Legende des Walds,
Sanfter ein Krankes nun die wilde Klage des Bruders.

Also rührt ein spärliches Grün das Knie des Fremdlings,
Das versteinerte Haupt;
Näher rauscht der blaue Quell die Klage der Frauen. („Sebastian im Traum“)

メンヒスベルクにて

秋の楡の木陰で 朽ちた小径が沈んでいくところ、
木の葉葺きの小屋から、眠っている羊飼いたちから遠く、
いつも さすらう者のあとを 冷たい 暗い姿が追う

骨でできた小橋のうえを、少年のヒヤシンスの声、
それは そっと 森の忘れられた伝説を語っている、
より優しく語る 病むもの そして 兄の荒々しい嘆きを。

そして わずかな緑が 異郷者の膝に
石となった頭に 触れる、
より近くに 青い泉は 女たちの嘆く声となり ざわめきを寄せる。
(『夢のなかのセバスチャン』より)

「メンヒスベルク」とは、ザルツブルクの旧市街の西側に近接した小高い丘であり、ザルツブルクの目抜き通りであるゲトライデガッセを突き当たると、そこからすぐに上っていくことができる。丘の上には鬱蒼とした木立の間をうねうねといくつにも枝分かれした小道が続き、トラークルはここを非常に好んで歩き回った。詩の冒頭の「秋の楡の木陰」はそうした情景に適合するように思われる。しかしこの詩はそれ以外には、詩「美しい町」や詩「南風(フェーン)の吹いている郊外」に比べて、現実の場所とのかかわりは希薄になっていると言えよう。それゆえ Johannes Zuberbühler のように、ここに描かれているのは、現実のメンヒスベルクの風景というよりも「詩人の魂の風景」(注4)だとする意見も頷けないわけではない。すなわち、ここに描き出されるのは「朽ちた小径が沈んでい」き、「骨でできた小橋」がかかる、滅亡へと傾いていく世界である。その中を「さすらう者」、もしくは「兄」や「異郷者」とはすべて詩の主体の姿であろう。それは「冷たい 暗い姿」に追われている。この「冷たさ」や「暗さ」は滅亡や死のもつ冷たさや暗さであると同時に、詩の主体のもつ罪の意識を暗示していよう。だからその口をついて出るのは「荒々しい嘆き」、つまり苦痛や絶望の叫びでしかない。そしてその「頭」は「石」となる。滅亡は詩の主体の身体に侵入し、死滅させるだけでなく、詩的主体が認知したり、思考する能力も侵し、機能不全に陥らせる。あるいは詩の主体は罪の意識からくる苦痛から逃れるために、認知したり、思考することを放棄し、ただ無機質の存在に硬直しようとしているともいえる。だがそこに「少年のヒヤシンスの声」が響く。「少年の声」は「ヒヤシンス」という春の始めに咲きだす可憐な花と結びつけられることで、死の硬直と対照的な、生き生きとした、有機的な生の可能性を暗示しよう。それだけでなく、この花のもつ青という色は、「少年の声」のもつ無垢さ、清浄さを際立たせよう。さらに「ヒヤシンス」はギリシャ神話において少年ヒヤキントスの化身であることを思い出せば、その「声」は太古の自然の領域に属することが考えられる。だからこの「声」が「森の忘れられた伝説を語っている」のも不思議ではない(注5)。この「声」はまた「わずかな緑」として、聴覚的だけでなく、視覚的にも表される。それは詩の主体の「膝」と「石となった頭に触れる」。ここには明らかに滅亡の中をさすらう者を慰め、その苦痛を宥め、罪の浄化をももたらそうとする動きが感じ取れよう。だから、詩の最後で「兄の荒々しい嘆き」は、一方で「女たちの嘆く声」へと和らげられ、他方で「青い泉」の声へと浄化される。つまり、この詩では圧倒的な滅亡への傾きの中でもなお救済の可能性が探られていると考えられる。この詩は文の意味の区切りと詩行の区切りがほぼ一致している。さらに詩行はそれぞれ、その内部の語が頭韻や半韻によって音響的に緊密に結合し、詩行としてのまとまりを強く感じさせる。こうした形式は陰鬱な気分を基調とするこの詩に、ある種の安定感を与えていると言えよう。

ではなぜ滅亡の中にあって救済の可能性を秘めた場所を詩人は「メンヒスベルク」と呼んだのだろうか。すでに述べたように、一読した場合、この詩に描かれる事物や事象は特に現実のメンヒスベルクを髣髴とはさせない。しかしザルツブルクの旧市街からメンヒスベル

クへと上り、その上を歩くと、この丘はまさに町の西のはずれにそびえる一種の「壁」であると感じられる。詩「南風(フェーン)の吹いている郊外」で述べたように、ザルツブルクの町の北側はもはや壁でせき止められることなく、無節操に、散漫に、無制限に拡大する「郊外」に化していく。それに対してメンヒスベルクはかろうじて町を外から区切る境界の「壁」として存在している。まさにこの「壁」「塀」**Mauer** という形象はトラークルの詩作において頻出する形象の一つである。それは一方で、例えば「死んだ孤児たちが 庭の塀のところに横たわっている」(詩「詩編」)「ひとつの暗いものが しばしば現れる。歩みのなかを／秋の中に立つ壁のところに」(詩「秋の夕べ」)「たえず 鳴りつづけている／黒い塀では 神の孤独な風が」(詩「エーリス」)というように、滅亡や死の場として示される。だが他方で「精神の孤独な時には／なんと素晴らしいことか。陽を浴びて／夏の黄色い壁に沿って 歩いていくのは」(詩「ヘーリアン」)「心なごんだ者となり ぼくたちは 赤い壁に沿って歩み」(「同上」)「やがて 朽ちた塀のところに／葦が 花咲き／孤独な者のこめかみは こんなに静かに 緑になる。」(詩「春に」)というように、平和や安息の場として、あるいは新たな生命の蘇りの場としても示される。つまり、トラークルの「壁」とは一つの「境界」領域であり、それゆえにこそ滅亡が救済へと転じる可能性を秘めた場として捉えられたのではないだろうか。

だがまもなく、この境界領域としての「壁」もついには持ちこたえられなくなっていったと考えられる。前述したように、戦場に赴いたトラークルは言語を絶する体験の末、ピストル自殺を図る。それは未遂に終わったものの、精神鑑定を受けるために野戦病院に収容された彼をフォン・フィッカーが見舞った際に、彼は詩「嘆き」と詩「グロデアク」を読んで聞かせた。結局この2編の詩が詩人の最後の作品となる。その一つ「嘆き」は次のとおりである。

Klage

Schlaf und Tod, die düstern Adler
Umrauschen nachklang dieses Haupt:
Des Menschen goldnes Bildnis
Verschlänge die eisige Woge
Der Ewigkeit. An schaurigen Riffen
Zerschellt der purpurne Leib
Und es klagt die dunkle Stimme
Über dem Meer.
Schwester stürmischer Schwermut
Sieh ein ängstlicher Kahn versinkt
Unter Sternen,

Dem schweigenden Antlitz der Nacht.

嘆き

眠りと死、陰鬱な鷺たちが
夜通し この頭のまわりでざわめき 舞っている、
人間の金色の像を
永遠の 氷りつくような波が
飲み込むようにと。身の毛のよだつ岩礁で
深紅の身体が砕け
暗い声が 嘆いている
海のうえで。
激しい憂愁の妹よ
ごらん 一艘の不安な小舟が 沈んでいく
星たちの下で
夜の沈黙している顔の下を。

この詩は、詩「メンヒスベルクにて」と比べて、詩行の長さが明らかに短い。文は統語法にさからって極度に分割され、句またがりが増え繰り返される。詩「メンヒスベルクにて」で見たような、詩行内での頭韻や半韻による語たちの相互の音響的な結合ももはやほとんど消えている。この詩のもつこうした形は、この詩が詩人の心身の蒙った暴力や詩人の抱える不安や苦痛や孤独の直接的な表出であり、詩人の「嘆き」そのものであることを表しているといえよう。詩「メンヒスベルク」においては詩の主体である「兄」の「荒々しい嘆き」は宥和され、浄化される可能性が示されていた。それに対してこの詩では、詩の主体の「頭」は「陰鬱な鷺たち」の「ざわめき」から逃れられない。その「ざわめき」は「人間の金色の像」が「永遠の氷りつくような波」に「飲み込ま」れることを予告する。「人間」は理想的な姿に到達することも、追放された楽園へ再び呼び戻されることも、「永遠」に拒絶されていることを詩の主体はいやおうなしに感じる。すでにもう、「深紅の身体が砕け」ていく。肉体としての人間はすでに崩壊しつつある。それだけでなく「深紅」はキリストの流した贖いの血を暗示するのであれば、人間の贖罪の可能性も破壊されてしまった。この詩の「嘆き」とはこうした人間の絶対的な没落を予見する詩の主体の絶望であろう。

その詩の主体がいる世界は今、「波」の荒れ狂う大海原だ。それは「人間の金色の像」を「飲み込み」、「一艘の不安な小舟が沈んでいく」、底知れぬ奈落へと続く世界だ。どこにも陸は見えない。ただ「身の毛のよだつような岩礁」だけがこの「海」の中から突き出ている。それは一種の「壁」のようにも思える。だがそれは「人間」を「海」から救い、守るどころか、「人間」を危険にさらす。こうして詩の主体はもはやどこにも「壁」のない世界の

中へ、換言すれば外部へ完全に開いている世界の中へ放り出されている。滅亡が救済へと転換する可能性を秘めた境界領域はもはやない。だから詩の主体の頭上には「夜の沈黙している顔」が広がる。「星たち」は見えるが、それらは「人間」に明るくまたたき、優しく迎えることはない。「星たち」はただ「人間」を拒絶する、あるいは「人間」に無関心な暗黒が広がるだけだ。

しかし、このように絶対的な没落を予見する詩の主体の「嘆き」の「声」は最後に「激しい憂愁の妹」に呼びかけ、「一艘の不安な小舟が沈んでいく」のを「見る」ようにと懇願する。「激しい憂愁の妹」*Schwester stürmischer Schwermut* という詩行は、この詩の中で唯一、この詩行を構成する3語すべてが頭韻を踏み、詩全体の中で音響的にくっきりと際立たされている。だとすれば、無限の中にむき出しにされた詩の主体が最後の拠り所としたのは「妹」だと言えよう。だが、この「妹」もまた「激しい憂愁」に包まれている。そして「妹」が「沈んでいく」「小舟」を見るのかどうか、あるいはたとえ「妹」がそれを見たとして、「妹」が見ることによって、「小舟」が「沈んでいくこと」から救われるかどうかは語られていない。

すでに述べたように、この詩をフォン・フィッカーに読んで聞かせたほぼ1週間後に、詩人は事故とも自殺とも思われる死を遂げる。「不安な小舟」は「沈んで」しまったのだろうか。そして詩人が最後に拠り所として考えた「妹」が、詩人にとって生涯唯一愛した女性であった妹のマルグレーテ（通称グレーテ）を暗示するのであれば、彼女もまた詩人の死の3年後の1917年9月に、ピストル自殺によって25歳の短い生涯を閉じた。第一次世界大戦が終結したのはその1年後であった。この人類史上最初の世界大戦では、これまでにない大規模な殺戮を可能にする破壊兵器が投入され、人的にも物的にも甚大な被害をもたらされ、膨大な数の犠牲者が出た。戦争終結は同時に、詩人の故国ハプスブルク帝国の瓦解の時でもあった。トラークルはハプスブルク帝国をはじめとした古いヨーロッパの伝統的世界の崩壊を自身の内面において体験したとも考えられる。

トラークルは詩の中で繰り返し、滅亡や没落を告げる鳥としてアムゼルの姿を描いた。日本にはいないこの漆黒の鳥の姿がザルツブルクの家々の庭先の垣根や藪の間に蠢くのを初めて見たとき、詩の中の滅亡や死がはっきりと実感できるような気がした。しかしその直後、黄昏時の薄闇を貫いて、まるで天に届くかのように澄んだその歌声が響き渡るのを聴いたとき、トラークルはこの鳥を確かに滅亡の鳥として捉えながら、だが同時に、人間の、今は失われた、根源的な自然や神的存在との直接的な結びつきの記憶を呼び覚ますものとして描いたことが感覚的に理解された。ザルツブルクを訪れ、詩人の足跡をたどるごとに、私には詩人の言葉が一層くっきりとなり、詩人の描く世界の奥深くにあるものを感じ取ることができるのだ。

中村 朝子（上智大学）

注1) Otto Basil: Georg Trakl in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Hamburg 1965 参照。

注2) Israel Chalfen: Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Frankfurt am Main 1983 参照。

John Felstiner: Paul Celan. Eine Biographie. München 1997 参照。

関口裕昭『.パウル・ツェランへの旅』(郁文堂 2006年)参照。

注3) Carl E. Schorske: Wien. Geist und Gessellschaft im Fin de Siècle; Deutsch von Horst Günther, München 1994, S. 29.

注4) Johannes Zuberbühler: "Der Tränen nächtige Bilder" Georg Trakls Lyrik im literarischen und gesellschaftlichen Kontext seiner Zeit. Bonn 1984, S. 55.

注5) 「少年のヒヤシンスの声」という詩句は、トラークルが別の詩「少年エーリス」で「お前の身体は一つのヒヤシンスだ」と描いた少年「エーリス」を連想させる。この「少年エーリス」はトラークルの作品に散見できる神的、超越的、根源的、永遠的、詩的存在としての「子供」像の集大成として捉えられる(拙論「トラークルの「子供」—ロマン主義の「子供」との関連において—」(『上智大学ドイツ文学論集』 39号 2002年 89~116頁参照)。

その他の参考文献

Ludwig Dietz: Die lyrische Form Georg Trakls. Salzburg 1959.

Hans Esselborn: Georg Trakl. Die Krise der Erlebnislyrik. Wien 1981.

Ernst Hanisch, Ulrike Fleischer: Im Schatten berühmter Zeiten—Salzburg in den Jahren Georg Trakls(1887-1914). Salzburg 1986.

Hans Waichselbaum: Georg Trakl. Eine Biographie mit Bildern, Texten und Dokumenten. Salzburg 1994.

0110

作成日 : 2014/09/09